

[ニジェール]

いつか夢の オリンピックへ

オリンピックというあこがれの舞台を目指して稽古に専念するニジェールの柔道選手。そんな彼らを全身全霊かけて指導するのは、青年海外協力隊員だ。

Close Up!

ジャイカの
あしあと



屋内でも砂埃の舞うニジェールの道場。度重なる停電。

十分とはいえない環境の中、週3回、ナショナルチームの選手たちが稽古に励む。直前に行われた大会の成績が振るわず、惜しくも北京オリンピック出場は果たせなかったが、熱気あふれる道場には、あきらめ切れない夢の舞台に挑戦し続ける選手たちの姿がある。

そんなニジェール柔道界で、世界レベルの選手を育成しようと闘志を燃やすのが、青年海外協力隊の大西琢也さん。小学1年生から22歳で協力隊に参加するまで選手として柔道一筋に生きてきた。現在は、ナショナルチーム約20人の専属コーチ、そしてチームのコーチ陣の指導者として、同国柔道の発展を支えている。

ニジェール柔道は、西アフリカで1位2位を争うほどのレベルを誇る。身体とともに精神面も鍛錬できる武道であることから、人気の高いスポーツの一つだ。しかし、練習環境に恵まれず、また適切な指導方法を熟知したコーチが足りない現状がある。

とはいえ、長い手足に弾力性の

高いバネと強力なパワー。稽古では身に付かない、日本人柔道家も

うらやむような身体能力をニジェール人は持つ。その上で、瞬時にたくさん技を繰り出せるようになれば、オリンピックでの活躍も夢ではない。大西さんは、まだまだ技が少ない選手たちにバリエーションの幅を広げられるよう、「まず自分でやって見せ、質問させる」ことを徹底している。その

かいあってか、最初はただ見ているだけだった選手たちが、最近では「この技が使えない場合はどのように工夫したらいいのか?」と積極的に聞いてくるようになった。そうした変化に合わせて大会の成績が上がっていることに、大西さんは喜びを隠せない。

「柔道は礼に始まり礼に終わる。技術以外でも教えることは多い」と大西さん。自分自身も柔道の精神を忘れず、世界大会で活躍できる基盤をつくり、指導したことが次世代にも受け継がれるよう、「乾坤一擲」の闘いに挑んでいる。

